

五条の橋（松口月城）

五条の橋畔 月下の笛

弁慶 剛勇 薙刀の光

源家の曹子 是れ牛若

鉄扇 能く払う 白刃の霜

前後 左右 飛鳥の如く

朱欄 高き処 黄裳を翺す

千刀 悲願 遂に就らず

戈を捨て 罪を詫びる 武蔵坊

鴨の清流 水 清静

笛の音 遠く去つて 余韻 長し

解説 千本の刀を集める悲願をもつ武蔵坊弁慶が五条の橋で牛若丸と対決する物語を詩に託した。

語釈 ※五条の橋 〓 京都市を流れる鴨川に架設された橋。 ※橋畔 〓 橋のたもと。  
※剛勇 〓 強いさましいこと。 ※薙刀 〓 平安時代に登場した武器で、長い柄の先に反りのある刀身を装着した武器。 ※白刃 〓 鞘から抜いた刀の刃。ぬきみ。  
※飛鳥 〓 飛ぶ鳥のよう。 ※黄裳 〓 黄色の衣装。 ※千刀悲願 〓 千本、刀を集める悲願。 ※戈 〓 青銅製武器の一種。 ※武蔵坊 〓 武蔵坊弁慶。 ※清静 〓 清く静かなこと。 ※余韻 〓 かすかに残る響き。

通釈 五条の橋のたもとを月が照らし、美しい笛の音が響く。橋のたもとでは武蔵坊弁慶の薙刀の光が待ち受けていた。そこに源氏の宗嗣・牛若丸が現れた。弁慶はそなたの刀を出せと迫り薙刀で切りつけるが、牛若丸の鉄扇で簡単に払いのけられた。弁慶は怒り狂い必死で薙刀を振り回すが、牛若丸は前後左右、飛ぶ鳥の如く舞い、五条の橋の欄干に黄裳が翺った。弁慶は疲れ果て千刀悲願は諦め、戈を手放し「そこもとは鞍馬の牛若丸様であろうか」と問うと「さよう」と答えたので、切りつけた罪を詫び、「儂を家来にして下され」と願い出た。鴨川の清流は静かに流れ、牛若丸が吹く笛の音の余韻が長く飮した。